

利用者氏名: ○四日市 悟 (1)、中井 恒 (1)、渡辺 康 (1)、延與 秀人 (1)

理研における所属研究室名:(1) 仁科加速器科学研究センター 放射線研究室

1. 本プロジェクトの研究の背景、目的、関係するプロジェクトとの関係

放射線研究室では国内外の高エネルギー粒子加速器を用いて、原子核物理学の実験的研究を行っている。研究の主目的は、強い相互作用をする素粒子であるクォークやグルーオン、およびそれらが構成するハドロン（陽子、中性子）の性質を理解し、強い相互作用の法則である量子色力学(QCD)を実験的に解明することである。具体的には、RHIC/PHENIX 実験での原子核衝突実験により生成される高温状態におけるクォーク・グルーオンプラズマの性質の研究、同じく PHENIX 実験での偏極陽子衝突実験による、陽子スピンの担い手としてのグルーオンやクォークの性質の研究、J-PARC での陽子原子核反応実験による高密度状態での中間子の性質の研究などを遂行している。

このような高エネルギー原子核実験では、たとえば毎秒 100 万回におよぶ原子核反応から、400 万チャンネルの大型検出器を使用して毎秒 500 MB におよぶ大量のデータが記録される。年間での典型的データ量は、生データで 1PB、荒い解析後で 200 TB 程度となる。

このデータを取り扱うため、大規模ストレージおよび大量の CPU パワーは必須であるが、当研究室では 2000 年度より計算機センターである RIKEN-CCJ を運用し、国際共同実験 PHENIX の遂行に大きな役割を果たしてきた。増大するデータ量に対応するため、2004 年度からは情報基盤センターの運用する RSCC、その後 RICC で CPU を占有利用し、また大規模ストレージ HPSS を利用してきた。

2. 具体的な利用内容、計算方法

実験固有のデータ解析およびシミュレーションソフトウェアを使用している。また、業界共通の toolkit ある GEANT、ROOT などのライブラリを使用している。国際共同実験のため、世界各地で同じデータをもとに解析を進めている。その際解析場所によって結果が変わる

ことを防ぐことが重要な課題になっており、共同実験全体で、OSなどのソフトウェア環境を統一することにした。その環境構築は、2017 年度までは CPU ノードの占有利用により行っていた。

HOKUSAI の IA サーバ運用開始ののち、占有利用ができなくなったため、コンテナ技術を用いた上記環境の実現をめざし、テストをおこなっているところである。

また、HOKUSAI 移行により HPSS は廃止されたが、そこに保管されていた実験データ 1.7 PB のうち生データを除く 0.9 PB の実験データを HOKUSAI のストレージに移行して使用している。2020 年度は 60 TB、2021 年度は 50 TB の J-PARC 新規実験データのストレージとしても利用している。

3. 結果

研究成果リストに示すように、6 報の査読つき論文が出ている。研究の性格上、2021 年度以前の実験データおよび解析結果に基づく論文も含まれる。

4. まとめ

高エネルギー原子核実験の大規模データの解析のためには、HOKUSAI のストレージを使用することが必須である。ストレージ利用のほか、2021 年度もコンテナ技術のテストをおこなった。新規実験データを 50TB ほど格納した。現在合計で 1060 TB ほどテープストレージを利用している。

5. 今後の計画・展望

コンテナ技術による運用可能性を実証した上で必要に応じて CPU 資源追加を申し込む予定である。場合によっては Hokusai Sailing Ship の月単位使用も視野にいれている。いずれにせよインテルアーキテクチャの CPU が前提であり、2-3 年以内に GPU を利用することはないと考えている。ペタバイト級ストレージについては PHENIX 実験、その後継の sPHENIX 実験、J-PARC 実験とも必須であるので、引き

2021年度 利用報告書

続き利用させていただかないと実験が成立しない。J-PARC での実験は 2020 年より開始して最低 2022 年までは、また、sPHENIX 実験は 2023 年より 2025 年までデータ取得が行われる。取得完了後 5 年程度は利用したいという計画である。なお、理研の規程により、論文投稿より 5 年間のデータ保存義務があることに鑑みても、データ取得終了後最低 5 年のストレージ利用は必須となる。システム更新によるテープストレージからディスクストレージへの移行についてはいずれ相談したい。

6. 利用がなかった場合の理由

コンテナ技術利用計画が未完のため、一般の計算ノードは使用していない。

2021年度 利用研究成果リスト

【雑誌に受理された論文】

1) Transverse-single-spin asymmetries of charged pions at midrapidity in transversely polarized p+p collisions at $\sqrt{s}=200$ GeV

U.A. Acharya et al. (PHENIX Collaboration), Phys. Rev. D 105, 032003 (2022)

2) Transverse single spin asymmetries of forward neutrons in p+p, p+Al, and p+Au collisions at $\sqrt{s_{NN}}=200$ GeV as a function of transverse and longitudinal momenta

U.A. Acharya et al. (PHENIX Collaboration), Phys. Rev. D 105, 032004(2022)

3) Kinematic dependence of azimuthal anisotropies in p+Au, d+Au, and 3He+Au at $\sqrt{s_{NN}}=200$ GeV

U.A. Acharya et al. (PHENIX Collaboration), Phys.Rev. C 105 (2022) 2, 024901

4) Probing Gluon Spin-Momentum Correlations in Transversely Polarized Protons through Midrapidity Isolated Direct Photons in $p^\uparrow+p$ Collisions at $\sqrt{s}=200$ GeV

U.A. Acharya et al. (PHENIX Collaboration), Phys.Rev.Lett. 127 (2021) 16, 162001

5) Performance of RHICf detector during operation in 2017

RHICf Collaboration: O. Adriani et al. , JINST 16 (2021) 10, P10027

6) Data acquisition system in the first commissioning run of the J-PARC E16 experiment

T.N. Takahashi et al., IEEE Transactions on Nuclear Science, 68, 1907 (2021)

【会議の予稿集】

Status and Prospects of the LHCf and RHICf experiments

LHCf and RHICf Collaborations: Hiroaki Menjo et al., PoS ICRC2021 (2021) 301, Contribution to: ICRC 2021, 301

【その他(著書、プレスリリースなど)】

直接光子による陽子内グルーオンの運動の観測に成功

2021年10月15日 理化学研究所

https://www.riken.jp/press/2021/20211015_1/index.html